

續日本古典讀本

V

太平記

明安積永

日本評論社

續日本古典讀本

V

太 平 記

永 積 安 明

日 本 評 論 社



昭和23年10月10日發行

太 平 記

定價 200 圓

著 者 著者 永 積 安 明

發行者 鈴木三男吉

發行所 中央區京橋3丁目4番地
株式會社 日本評論社

出協會員 A114008 號
電話京橋(56) 6191-3 番
振替 東京 1 6 番

印 刷 圖書印刷株式會社
製 本 青 木 製 本 所

はじめに

太平記といえは、それだけでもうひとつの動かすこともできないかのような常識があつて、その常識をうちやぶり、俗論を俗論として突き出すことは、とうてい不可能な状態が長い間つづいて來た。

それほどこの常識は強力な「權威」をもつて、わたしたちの上にのしかかつていたのだ。

わたしはそんな神祕的な「權威」を背景にして積みかさねられて來た、うつとうしい太平記觀とは別のところに、太平記そのものの語りかける聲をききとり、それを一度は整理し組織しておかねばならぬと思いつづけて來た。

一九四〇年の早春、わたしはこの同じ叢書の一巻として「平家物語」を書き終え、四一年にはその仕事にとりかかつていた。だからこの「太平記」の「本文篇」は、四一年から四二年にかけて、準備作業のつもりで、流布本を中心にぼつぼつ書きためて行つたものということになる。

ところが、いよいよ「研究篇」にかかろうとする頃から、この物語についての批判的な研究をすめ、それを公表することなど、全く不可能であることを思い知らねばならなかつた。

「南北朝」という言葉さえ禁止された時に、どうして南北朝時代そのものの科學的な分析を發表することができらう。

わたしのペンには動かなくなつた。そうしてこのことによつても、わたしはあのうつとうしい毎日を

いつそうはじめなものとして送り迎えにわけにはゆかなかつた。

しかし今こそ太平記観についても、あからさまに俗論を俗論として批判することができる。太平記をはじめ根本的に自由に論じ、あのおそろべき傳説的な「權威」をかきに、のさばつていた常識をつきやぶることもできる。

こうしてわたしはこの稿をまとめながら、政治と學問との深い有機的なつながりを心の底から感じとらないわけにはゆかなかつた。

まつとうな政治が進めばそれだけ、研究の自由は擴大され、その成果は無制限に實りつづけるだろう。

この拙い走り書きにも似た試論を書き出すことができたというのも、こんなにちのような事態、いわば進歩的な政治の可能性、明るい未來への展望に、わたしのようなものでもつき動かされはげまされた結果にほかならない。

新しいペンをとりかえて、わたしはもつとしらべあげた本論へ進まねばならぬことを強く感じるものだ。

一九四七年五月

東京杉並の假寓で

著

者

(梗概).....六四

大塔宮熊野落ちの事.....六四

卷 第 六八〇

民部卿三位局御夢想の事.....八〇

(梗概).....八四

卷 第 七八五

吉野の城軍の事.....八五

千劍破城軍の事.....九二

(梗概).....一〇〇

先帝船上へ臨幸の事.....一〇一

(梗概).....一〇九

卷 第 八一〇九

(梗概).....一〇九

卷 第 九一一〇

(梗概).....一一〇

六波羅攻めの事

(梗概)

一一

卷第十

(梗概)

稻村崎干潟となる事

一九

(梗概)

龜壽殿信濃へ落さしむる事附左近大夫偽つて奥州へ落つる事

二三

(梗概)

卷第十一

(梗概)

筑紫合戦の事

二九

(梗概)

卷第十二

公家一統政道の事

二六

(梗概)

二四

卷第十三……………一四四

(梗 概)……………一四五

卷第十四……………一四六

(梗 概)……………一四七

卷第十五……………一四八

(梗 概)……………一四八

卷第十六……………一四九

(梗 概)……………一四九

正成兵庫に下向の事……………一五〇

(梗 概)……………一五四

正成兄弟討死の事……………一五五

(梗 概)……………一五八

正成が首故郷へ送る事……………一五八

卷第十七……………一六〇

(梗 概)……………一六一

卷第十八 一六四

先帝吉野へ潛幸の事 一六四

(梗概) 一六

金崎城落つる事 一六

(梗概) 一七

卷第十九 一七

(梗概) 一七

卷第二十 一七

(梗概) 一七

義貞自害の事 一七

(梗概) 一八

義貞の首を獄門に懸くる事附 勾當内侍の事 一八

(梗概) 一七

卷第二十一 一八

天下時勢粧の事 一八

(梗 概) 一九〇

先帝崩御の事 一九〇

(梗 概) 一九五

卷第二十二 一九六

(梗 概) 一九六

卷第二十三 一九七

(梗 概) 一九七

卷第二十四 一九八

(梗 概) 一九八

卷第二十五 一九九

(梗 概) 一九九

卷第二十六 二〇〇

正行吉野へ参る事 二〇〇

(梗 概) 二〇三

卷第二十七 二〇四

(梗概) 二〇四

田樂の事附長講見物の事 二〇五

(梗概) 二一〇

卷第二十八 二二一

(梗概) 二二一

卷第二十九 二二二

(梗概) 二二二

卷第三十 二二三

(梗概) 二二三

卷第三十一 二二三

(梗概) 二二三

卷第三十二 二二三

(梗概) 二二三

卷第三十三 二二四

(梗概) 二二四

飢人身を投ぐる事……………二四

公家武家榮枯地を易ふる事……………二七

(梗 概)……………三〇

卷第三十四……………三〇

(梗 概)……………三〇

卷第三十五……………三一

(梗 概)……………三一

卷第三十六……………三一

(梗 概)……………三一

大地震夏雪の事……………三三

(梗 概)……………三四

卷第三十七……………三四

(梗 概)……………三四

卷第三十八……………三五

(梗 概)……………三五

卷第三十九	三三
-------	----

(梗概)	三五
------	----

卷第四十	三六
------	----

(梗概)	三六
------	----

將軍薨逝の事	三七
--------	----

細川右馬頭西國より上洛の事	三八
---------------	----

研究篇

太平記序説	三三
-------	----

はしがき	三三
------	----

I 太平記の成立について	三五
--------------	----

II 太平記の構想について	三五
---------------	----

III 太平記の批評精神について	三七
------------------	----

IV 太平記の表現について	三九
---------------	----

むすび	三〇
-----	----

〔附録〕 太平記研究の手引	三五
---------------	----

本
文
篇



太平記

卷第一

後醍醐天皇御治世の事 附 武家繁昌の事

爰に本朝人皇の始め、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇の御宇に當つて、武臣相模守平高時と云ふ者あり。此の時上君の徳に垂き、下臣の禮を失ふ。これより四海大に亂れて一日も未だ安からず。狼煙天を翳め、鯢波地を動かす事、今に至るまで四十餘年、一人として春秋に富めることを得ず。萬民手足を措く所なし。倩其の濫觴を尋ねれば、晉に禍ひ一朝一夕の故にあらず。元暦年中に、鎌倉の右大將頼朝卿、平家を追討して其の功あるの時、後白河院叡感の餘りに、六十六箇國の總追捕

(1)神代に對し、神武天皇以後の天皇をいう。(2)「御宇」宇内を治める意。御代。(3)北條貞時の嫡男、北條氏は平氏である。(4)のろし。烽火。(5)ときのこえ。鯢(メクデラ)がその子を引つれて大海に歸る時、號音を生ずるによる。(6)未だ年若く餘生に富む意だが、ここでは亂戰の爲若い人が多く早逝したことをさす。(7)安心して生活する所がない。(8)濫はウカブ觴はサカヅキ。楊子江も源は杯を浮べる位の僅かな水にすぎない意から、もののおこり。はじめをいう。(9)天皇の御感。(10)もと國々の守護を追捕使といつたので、守護の總領の義。

使に補せらる。これより武家始めて諸國に守護を立て莊園に地頭を置く。彼の頼朝の長男左衛門督頼家、次男右大臣實朝公、相續いて皆征夷將軍の武將に備はる。之を三代將軍と號す。然るを頼家は實朝の爲に討たれ、實朝は頼家の子惡禪師公曉の爲に討たれて、父子三代僅かに四十二年にして盡きぬ。其の後頼朝卿の舅、遠江守平時政の子息前陸奥守義時、自然に天下の權柄を執り、勢ひ漸く四海を覆はんと欲す。此の時の太上天皇は後鳥羽院なり。武威下に振はば、朝憲上に廢れんことを歎き思召して、義時を亡ぼさんとし給ひしに、承久の亂出で來て天下暫くも靜かならず。遂に旌旗日を掠めて、宇治勢多にして相戰ふ。其の戰ひ未だ一日も終へざるに官軍忽ちに敗北せしかば、後鳥羽院は隱岐國へ遷されさせ給ひて、義時彌八荒を掌に握る。それより後武藏守泰時、修理亮時氏、武藏守經時、相模守時頼、左馬權頭時宗、相模守貞時相續いて七代、政武家より出でて徳窮民を撫するに足り、威萬人の上に被ると雖も、位四品の際を越えず。謙に居て仁恩を施し己を責めて禮義を正す。これを以て高しといふとも危からず、盈てりといふとも溢れず。承久より以來、儲王攝家の間に、理世安民の器に相當り給へる貴族を一人鎌倉へ申下し奉りて、征夷將軍と仰いで、武臣皆拜趨の禮を事とす。同じき三年に始めて洛中に兩人の一族を居ゑて、兩六波羅と號して、西國の沙汰をとり行はせ、京都の警衛に備へらる。又永仁元年より鎮西に一人の探題を下し九州の成敗を司らしめ、異賊襲來の守りを堅うす。されば一天下普く彼の下知に隨はずといふ處もなく、四海の外も均しく